

闇夜が訪ねてくる <3>

作: マックス一郎

転生編

外交官

コンテナ船より12年前の話。某南米の国に新たな脅威が覚醒する。

リベルタドル市、大ボリバル共和国の首都・2012年12月31日、夕方17時頃

ヘルムートがホテルの一室で暗くなるのを待っていた。

彼のような長寿者は日光でもある程度活動ができるものの、エネルギー消費が激しいため、なるべく夜で動くようにしていた。

主^{マスター}の命令でこの国について早5日。彼の主^{マスター}はある予感がしていて、徹底的に調べるように命令していた。主^{マスター}の命令により政府から外交官用旅券を発給して貰い、実際ドイツ連邦共和国の大使及び領事が空港まで出迎えに来てくれた。彼らは緊張の面持ちと隠し切れない恐怖で一流ホテルに連れて行き、セキュリティー要員も手配してくれた。そして一番大事な食事もお世話してくれた。

昨夜にそのもてなしを受けて、今は^{サースティ} 渴きを感じていない。

元々ヘルムートは大食いの方ではないし、^{サースティ} 渴きにしても、無意味な流血と消費を嫌っていた。

彼の主^{マスター}は死にゆくこの国の大統領に対して嫌悪感を抱いていた。品格と教養が欠如していると考えていたし、ヘルムートも同様の考えを持っていた。嫌悪感を持っていても、確かにこの国の大統領^{マスター}のオーラは異質で薄黒く、人間にしては壮大で悪意に満ちていた。ヘルムートの主^{レガシー}、この大統領が恐らく転生するとお考えになっていた。要するに自身で転生する場合、新たなる系統の^{ファウンダー} 開祖となる。

ここ数百年新たなる系統が現れてない。一番新しい系統は日本で現れた系統であり、基本は闇の評議会に参加していた。カルロス5世、アイヴァン雷帝、ナポレオン、ヒトラー、スターリン、毛沢東や^{マスター} ポル・ポットですら転生しなかった。ヘルムートの主^{レガシー}も比較的若い系統の開祖^{ファウンダー} だった。同じく比較的若い一派は東欧の小国で誕生した600年前のあの攻撃性が激しい変身能力持ちの系統^{レガシー} だった。一時期数を増やしたものの、人間の手及び他の系統の開祖^{レガシー} たちにより衰退していた。今^{レガシー} はその系統の開祖^{ファウンダー} は合衆国内にいるが、表立った活動はしていない。

レガシー
系統

ヘルムートの ^{マスター}主 はポーランドで発生した寄生虫を使って、感染した人間の遺伝子を組み換えし、別の生き物に変身させる ^{レガシー}系統の一部をつい最近滅ぼしたばかり。丁度ドイツ経由で合衆国に出発する直前。彼は ^{マスター}その ^{エルダー}主 を名乗っていた長寿者を自分の手で滅亡させた。合衆国内に先兵として派遣されていた元ナチスの将校と協力していた ^{レガシー}投資家もヘルムートの優秀な部下によって ^{ファウンダー} ^{エルダー} ^{マスター}跡形もなく消されていた。その系統の残った冬眠中の ^{レガシー}開祖 と長寿者たちはヘルムートの ^{マスター}主 の軍門に下った。

世界はバランスにより不完全ながら動いていた。そのバランスを壊そうとする勢力、闇の勢力、人間の評議会と闇の評議会の手により、滅亡する。

ヘルムートはこの大統領はカリブ海の島国であるキューバ人民共和国にいるのは知っていた、そして帰国する前に死亡するだろうと思っても間違いない。亡くなっても、すぐに転生すると限らないし、数日かかる可能性もある。
考えている最中にヘルムートの携帯電話がなった。

「はい、フォン・ブランケンブルクだ。」

ヘルムートが出た。

「フォン・ブランケンブルク閣下、この大統領がキューバで亡くなったと連絡が入った。情報部よりの秘密情報です。大統領遺体はこれから首都に大統領専用機のエアーバスで運ばれる。4時間以内にボリバル・スクレ空港に到着する予定。」

電話かけてきたのはドイツ連邦共和国大使だった。

「わかった。」

電話を切り、ベットに座った。これから忙しくなると思い、^{サースティ}昨夜のもてなしの残り物で少し 渴きを癒そうと考えた。その残り物は若くて、美しい日焼けした女性であり、床に座っていて、手足縛られていて、恐怖の目でヘルムートを見ていた。

「朝食の時間だ。」

彼女の目を見ながらヘルムートは言った。